

第101回「さんか・さろん」まとめ

・2020年12月15日(火)

・「コロナ禍とスローライフの可能性～
丹波篠山で何がおこっているのか～」

・竹見聖司さん

(丹波篠山市創造都市課 課長、兵庫県バレーボール協会審判委員会主事、篠山かるた会副会長、自治体学会企画部会部会長)



丹波篠山市での2019年開催のフォーラムが直近のスローライフ・フォーラムとなります。スローライフにふさわしいまち、美しい城下町。日本文化が根付いていることだけでなく、外に向かってうまくプレイアップしてきたことが素晴らしい。デカンショ節の歌詞の中で半年は哲学に浸り、後の半年は寝て暮らすとあります、これこそがスローライフでしょう。

フォーラムのテーマは、新しく“デカンショ”を唄おうでした。46人が市外から参加。竹見さんのご案内で市内見学後、元小学校舎「里山工房くもべ」で地元の方たちとの「夜なべ談義」を。地元の料理が人気でした。翌日は、3つの分科会后、増田寛也さんの進行で、井戸敏三・兵庫県知事、酒井隆明市長ほかで、これからの丹波篠山、スローライフについて語り合いました。思い出深い丹波篠山市の竹見さんのお話です。

<丹波篠山市はこんなまち>

市を上空から撮った写真。真中が篠山城跡、周囲の城下町は江戸時代と変わらない大きさで、町割りは現在も残っている。人口 41,000 人位、高齢化率 35%、面積は 377 平方 km、城下町の周辺に農家集落が点在し、周囲に丹波山地の山々が、全体で篠山盆地といわれる。

兵庫県の中央東部、大阪、京都、神戸まで 50 km 位、車で約 1 時間の距離。都会に近い田舎“とかいなか”、観光客も京阪神から沢山訪れる。1999 年に市は合併、このころから人口は徐々に下がりだしている。

特産、イベントが多い。デカンショ祭り、六古窯のひとつ丹波焼、丹波の黒豆、丹波栗、山



の芋、猪のぼたん鍋、など。また丹波篠山のABC マラソンは 30 年の歴史、毎年 1 万人がフルマラソン出場している。NHK 大河ドラマの「麒麟がくる」の明智光秀が丹波攻めをした時の逸話が高城山・八上城に残る。

<これまでのまちづくり>

2009 年に、丹波篠山城築城 400 年祭を実施した。当時、彦根城も 400 年祭で「ひこにゃん」登場。こちらは財政的に苦しく、華やかなイベントができず、お金がないなら知恵を出そう、ということでまちづくりの祭りをやろうとの取り組みをした。丹波篠山スタイル、丹波篠山らしいまちづくりをやっていこう、という。

2001 年頃、景観法ができ、景観に関する行政の許認可、まちづくりの方針などを市町村がやっていけるようになった。篠山市はひきうけていく力がなかったが、この 400 年祭をきっかけに自分たちでやっていこう、と景観行政団体への移行に取り組んだ。

河原町という重要伝統的建造物保存地区、ここで「丹波篠山まちなみアートフェスティバル」をやっている。2 年ごと 9 月のシルバーウィークにアーティストの方々を呼んで、町家をアトリエにして発表してもらう。人気の高いイベントになっている。

2008 年頃、市内には大学がないことから、神戸大学と連携協定を結んだ。かつて篠山に県立農科大学があり、後に神戸大学に移管、現在の農学部。この経緯からまず農学部と連携、2010 年には大学全体と連携協定を結び、地域おこし協力隊とかも一緒になってとりくんでいる。特に 2016 年から「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を市でつくり、この核の事業として JR の篠山口の駅なかに農村で新しい価値を生みだし、仕事をつくるためのスクールを開講しようと、丹波篠山市農村イノベーション

ラボを設け、地域の課題を解決するような人たちに勉強してもらい、地域で活躍してもらい、と取り組んでいる。5 年経ち、現在 150 人位の卒業生、現役生があり、30~40 人位が市内で起業している。150 人の中には市内が約 50 人、市外だが丹波篠山に縁がある人たちが 50 人位、残りの 50 人くらいは全く関係がないが、丹波篠山で学ぼうということで。今回の受講生には、オンラインで、東京からの参加の人もいる。

また国交省の事業で、約 10 億円程かけ、まちなかの電線地中化、道路の美装化等をしてい



る。

(電柱が消えた河原町)

まちづくりは行政だけでなく、一般社団法人ノオトが、城下町全体を一つのホテルとして町をつくっていこうということで今現在も取り組んでいる。城下町の空家を使って宿泊施設、レストランなどに改装し、事業者に使ってもらっている。雇用されている人たちも沢山出てきている。そして昔からあってここで人が暮らしている店、家もある。誇りに思っただけで暮らしているのが大事。

日本遺産というのが文化庁で 2015 年に制度化された。その日本遺産一号が「丹波篠山デカンショ節」。その後、「日本の六古窯」でも日本遺産に選ばれている。大事なものは、例えばデカンショ節が選ばれたと勘違いされやすいが、そうではない。歌詞に出てくる、黒豆、丹波霧、

ひと、鳳鳴義塾の文武両道ぶりもなど民謡に乗せて人々の暮らしが、生活が唄い継がれてきたことに価値がある、ということで文化庁からは第一号として認めてもらった。毎年8月には櫓を囲んでお城の前でデカンショ祭りを開催。新しいデカンショ節の歌詞も毎年市民が誇れるような唄をつくって披露している。デカンショを踊りながら故郷の記憶を守っていく、ここが



ポイントだ。

(デカンショ祭り、市ホームページから)

同様に世界をつなぐユネスコのクリエイティブシティというのにも2015年認められた。創造的な農村の実現を市として実践しているということで、まちづくりを進めている。

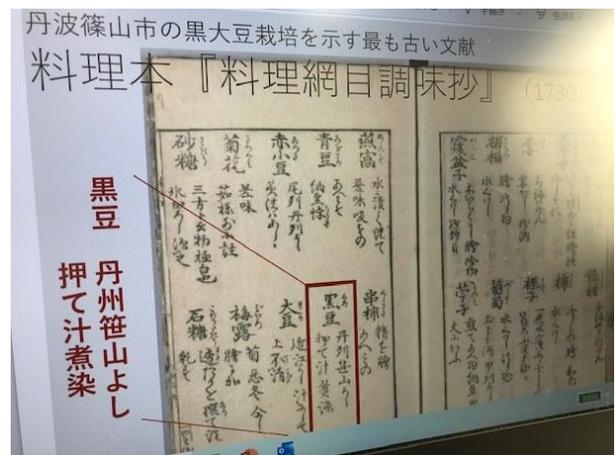
1999年に合併。この時は篠山市でスタート。2004年に隣りに丹波市ができた。丹波というのは京都府から兵庫県にまたがる大きなエリアを指すが、この名前が丹波市という一つの自治体の名称になってしまった。丹波篠山で頑張ってきたのに丹波市と篠山市が区別がつかなくなるというのが、課題になった。

消費者庁の食品表示では通常兵庫県篠山市産、というようにエリアを指定するのはできるが、丹波篠山産と我々が名乗りたくても、消費者に誤解を与える、ということで篠山市産とするような指導がおこなわれるようになった。せっかく大切にしてきた丹波篠山という呼称が使えなくなるのでは・・・、ということで逆転の

発想で市の名前を変えてしまえ、ということから丹波篠山市と名前を変えた。一昨年の11月住民投票。有権者の70%位の人の投票で55対45という市民の民意で決定し、その結果次年のスローライフ・フォーラムが今の市名で盛大にできた。

<日本農業遺産への挑戦>

本来支えてくれている黒豆とかお米といった農業の事を再度見直そうとしている。丹波篠山黒大豆の栽培、むらが支える優良種子、家族農業をテーマに日本農業遺産の登録を目指している。現在一次審査まで通って、二次審査の手前で、調査に来ていただいている。特に評価をされたのは、小学生が今現在、黒豆の粒を一粒一粒、良いもの、悪いものを選別している「黒豆選り」という作業。日本農業遺産では、最高に美味しい黒豆だということの評価するのではなく、子どもたちも含めて黒大豆の栽培を通じて守られ維持されてきた地域の文化、仕組みなどを評価する。



「優良種子」といわれる大切な種子をむらで選別して守り、次の年に栽培していくことも大事。黒豆は、江戸時代の文書、料理本にも、更には幕府への献上品ということでもでてくる。歴史を踏まえ優良な種子をどんどん選んでいい物を残していこうとしている。

ここは盆地で慢性的な水不足の課題がある。すべての水田に一番植えたいお米を植えてしまうと水が不足してしまう。この課題が江戸時代からあった。であれば、お米を作らないで、結果的に特産品になった黒豆をつくることでその水を節約していこうということをしてきた。むらの話し合いの中で今年は米を作らないでがまんしようという、犠牲田という仕組みができた。これも特徴だ。今もある黒豆の所と水田の所とのパッチワーク的なあり方が江戸時代からあった。灰小屋などもあった。

農業遺産に認めてもらうよう伝え、市民の皆さんにも伝えていく。農家の皆さんにも誇りをもって農業に邁進していただきたい。

丹波篠山ブランド戦略というものを、いま整理をしている。美しい町並みと農村景観、農業だとか食の聖地、歴史と文化芸術の都、さらにそういったものに培われた命輝く自然環境。これらを大切な地域資源としながら、さらには「丹波篠山人」私たち一人ひとり、そして私たちの暮らしそのものが、これから丹波篠山のブランドになる、ブランドにしていかななくてはいけないのだ、ということでスローライフの考えにもつなげていけたらと思っている。

<コロナ禍の丹波篠山のスローライフ>

春、京阪神との往来がとてもあるということで自粛要請にもなったが、家族で田んぼ仕事しているとマスクなど必要ないような環境で、改めて豊かな農のある暮らしをかみしめた。一方、お祭り、お寺の行事、地域の行事が今年は全て



(竹見さん家族と田んぼ)

中止に。これからの担い手が少ないという中でこれをきっかけに、もしかしてこのまますたれてしまうのでは・・・というのが私の問題意識だ。

丹波篠山では空家が価格上昇気味、という喜ばしい状況がおきている。一般社団法人ノオトさんの城下町ホテル構想ではないが、市内ではいま空家が足りなくて困っている。こういったいい環境をうまく回していけるように、頑張っていきたい。

今年の秋はGO TO キャンペーンもあり、イベントが中止でも、観光客は毎日たくさん来た。これからの観光はイベントで稼ぐというだけでなく、平日にも、シーズンオフにも来てもらえることを考える、いいきっかけとなった。

アフターコロナと地方都市ということで、今いろんな動きが出ている、様々なことがクローズアップされているが、実は今まで言われてきたことにもかかわらず実現してこなかったことが、今、加速度的に進んでいるようにも思う。変わるチャンスだ。

質疑応答

○は質問・感想、◇は答え、()内は居住地

○たまたま NHK で山の芋が紹介されていた。黒豆だけでなく山の芋とか、いくつかやった方がいいのでは・・・。(東京)

◇山の芋も大事な特産物なので力を入れているが、黒豆以上に手間がかかる。栽培面積が減ってきてるのが課題になっている。(竹見さん)



◇山の芋の元々原型は大和芋とか伊勢芋といわれている。平安時代からつくられ、

江戸時代にはカンショといわれていた。もともとは銀杏芋と言って銀杏の葉っぱのような形をしていたとか。兵庫県立農科大学の先生方が改良を加えて、タカシロ、ミタケという2つの品種がある。非常に粘り気があって美味しい。すり鉢ですりこみ、だし汁を入れて混ぜてご飯にかけて食べる。或いは、落とし汁といってすまし汁にすった芋を落とすと少し団子状になる。食パンに練りこんで使ったりしているパン屋さんも。いろいろな食べ方がある。(丹波篠山市)



○コロナで自治体と住民の向き合い方が、こんな風変わったよ、という事例を探している。ほ

かの自治体からでも教えていただきたい。(東京)

◇未だ最中、模索しているところ。リアルな会議とかがやれていない、イベントがことごとく中止という実態がある。年明け以降、



今までのような沢山の人を集めて何かやるというようなことなど、対策をと。当市はコロナだから何でもかんで

もやめればよいとは考えないと。やれることをまずはやって、地域の活性化はしていくべきだ。一回辞めるとここで終わってってしまうという心配がある。(岐阜県多治見市)

◇4月から市民病院に異動で、行政本庁の事はなかなかわかりにくい。病院から言うと本当に患者さんが離れてきている。公立病院も他の病院と同じように打撃を受けている。議会の承認委員会に参加したが、いろんなイベントとか、生涯学習課の子どもたちに対する放課後の集まりとか、ことごとく予算がおとされている。成人式は、一堂に会するのではなく二部形式とか、プラスオンラインとか、そちらの予算が上がっているのが興味深かった。(佐賀県小城市)

○篠山に通って40年。なんで篠山に魅かれるのか・・・。コロナで観光客が減っているんじゃないかと心配だが、いまは？(兵庫県神戸市)

◇秋のシーズンを心配していたが、10月だけで実数58万人位来ていただいた。イベントよりも町なかに人が来てもらう方がお金も落ちていただきやすいなど、そういう議論がこれから多分出てくる。市では住民懇談会を毎年市内20カ所くらいで6月にやるが、今年は人数



をしぼったうえで10月～11月に市内6カ所で行った。イベントは単に中止ということではなくて、何らかの代替案を示すようにと、職員にも住民にも声をかけている。SNSとかを使うことが注目されてきているので、若い人が参加しやすいという環境が整うのかな、という淡い期待もある。(竹見さん)

◇夜の飲食が10時までの自粛となったので、この時期の忘年会・新年会は大分打撃を受けている。協力金一日2万円で二週間、なかなかそれではもたない状況だ。介護施設、特養とかでクラスターが起きて戦々恐々となっている、厳しい状況。そんな中で思ったような活動ができていない、イベントもできていない。(埼玉県越谷市)

○夫婦で篠山がだいすきなので、又行きたい。小学生に黒豆の選別をさせているということ。小学生の時からそうやって農業に接しているのがすごくいい。(兵庫県宝塚市)

○今日のお話しは良かった。黒豆大好きです！
(兵庫県淡路市)

○空家が高騰している背景の理由いろいろあるかと思うが。(東京)

◇市の空家対策は10年くらいやっている。最初の頃は空家ありますか？という、まず地域の人たちから空家が出てこない。普段はいなくても盆・正月だけでも帰ってくるとか、仏壇、



神棚が残っているとかの理由で誰にも渡したくない。それが以前は多かった。もうひとつの理由は、売りに出すとか人に貸すとかに対して、地域の言葉で「なりが悪い」。つまり世間体が悪い。あそこの家何か困っているのではないか、という感覚があった。なので、そういう考え方ではなくて、むしろせっかくあるものだから使ってほしい、という地域の合意構成をとってきた。この10年位のひとつの成果だと思う。

また、来る人たちにとっての取次の役割、この地にこういう人が欲しい、来てほしい、大歓迎ですよときちっと伝えていくこと、そういう間に入るサポート役が大事。市で言うと丹波篠山暮らし案内所というところが窓口になっている。市だけではうまくできないが、一般社団法人ノオトとかが、京都で川床料理しているような人たちに、篠山でもできますよ、と紹介をして取次をしてくれている。(竹見さん)

◇ワーケーションで個人に来てもらいたい、企業単位で研修にという傾向はある。話のもっていき方次第なんだなと思った。困っていると思われたらいやだ、という心理が働いているから、そこを地域のために…という方に持っていかたい。(長崎県雲仙市)

○建築系なので気になったのですが、ノオトさんがなんで丹波篠山に目を付けたのか、或いは市から依頼したのか？・この会社が丹波篠山で仕事を始めた経緯は？(東京)

◇ 一般社団法人ノオトというのは市から始まっている。かつてはまちづくり会社と人材派遣、市の下請けの仕事をしてもらえるような部分を持つ会社と二つあった。これらを統合して整理していく中で、観光とかの事業系、営利企業をめざそうという会社と、コミュニティビジネス的なモノ含めて地域を支えて行こうという組織との2つに分けた時に、ノオトはコミュニティビジネスの方をやっていこうということで設立された会社。その中で市の課題となっていた空家のこともひとつのテーマとして発展していったという経緯だ。この時のノオトの代表理事をしていたのが、実は副市長をしていた方だ。城下町ホテル構想もその方のアイデアだった。私たちが子どもの頃にまちを歩いていると、横に並んだ百貨店というキャッチコピーがあった。町自体が一つの経営母体として宿泊からレストラン、結婚式場なども一緒にやってしまう、というようなイメージで、まち全体でお客さんを受け入れていこうという発想で展開されてきた。(竹見さん)

○ 黒豆のお味噌がおいしかった！庶民の味と高級な味が両方ちゃんとある。町の中にコンビニが無かったというのが印象。丹波篠山は素敵な街だと思う。(静岡県掛川市)

丹波篠山市の竹見さんはZOOMで現地から、東京・半蔵門の会場にはスタッフ含め7名。全国各地から約30名の会員の皆さんのzoom参加となりました。東京会場では黒豆をいただきながらの充実したひと時でした。

終了後に竹見さん宅の「黒豆選り」を見せていただきました。私たちが目にするのは綺麗な黒豆ばかりですが、あまりよくないものは味噌にするそうです。欠けているものもある。一粒一粒に地域愛がないとできない作業だと感心しました。



(東京会場では黒豆を食べながら)



※記録まとめ 事務局・丸山薫、野口智子

